

のぞいてみよう！ せんだいの歴史 ゆかりの絵画編

墨を巧みに操る菊田伊洲の「瀑泉図」

仙台市博物館 学芸企画室 寺澤慎吾

第1回

今月号からは、仙台ゆかりの絵画を紹介いたします。これまでの連載は、歴史資料をもとにした話題が中心でしたが、本連載では、今まであまり取り上げられなかった仙台の絵師の作品や仙台藩に関わる絵画などについて、その魅力や鑑賞ポイントなどをお伝えしていきます。

伊洲の「瀑泉図」

今回紹介するのは、仙台出身の絵師・菊田伊洲（一七九一〜一八五三）が描いた「瀑泉図」（双幅）という作品です。急



菊田伊洲 瀑泉図 仙台市博物館蔵

峻な岩場から落ちる滝を墨のみで表しています。目を見張るのは、墨の使い方のうまさでしょう。落ちる水は数本の薄い墨線ですと描きます。水際の岩は濃墨を用い、外側へ向かってぼかすことで立体感が生まれています。右幅の滝壺の水は濃淡織り交ぜた弧状の筆線で勢いが表されています。岩場の鋭い濃墨の草も良いアクセントです。この絵を見ると、滝の音や涼やかな空気感まで伝わってくるようです。暑い夏に掛けたくなる作品ではないでしょうか。

狩野派にしばらくいなかった伊洲

さて、伊洲は、江戸出身で仙台に身を寄せた絵師・武田竹亭（一七六四〜一八三九）の子として仙台で生まれましました。伊洲は幼い頃から絵を描くことを好み、仙台藩の御用絵師（藩からの絵の仕事を請け負う絵師）の家の一つである菊田家へ養子に入ります。当時の藩御用絵師は、そのならいとして、江戸の狩野家（江戸幕府御用絵師）に弟子入りし、修業しました。伊洲も例にもれず、木挽町狩野家・狩野栄信（伊川院。一七七五〜一八二八）に入門し、研さんを重ねます。狩野家では、古画の模写や代々伝わる絵手本などをひたすら写すことを修学の基本とし、文人画家などの画派の人々と交流することは禁止されたといわれています。

伊洲の作品には、狩野派の描き方にのっとった作品ももちろん多いのですが、一方でそれにしぼられないものも見られます。今回取り上げた「瀑泉図」にみられるように輪郭線を使わずに、ぼかしやにじみを多用した表現などは、狩野派の画風よりも、当時人気であった谷文晁（一七六三〜一八四二）の作風に通ずるところがあります。伊洲には、他にも微妙な雨を表現した「雨中山水図」や水辺の漁師たちの生活風景を描いた「漁業図」（いずれも仙台市博物館蔵）などがあり、伊洲が得意とした水墨の妙技を見ることが出来ます。

天理大学附属天理参考館・天理図書館 創立90周年 特別展

再開館記念企画第2弾

大航海時代へ
— マルコ・ポーロが開いた世界 —
To the Age of Exploration: the World Marco Polo Pioneered

2024.7.6(土) ~ 8.25(日)

【資料名】星座帳 ヨハン・バイエル著、地球儀 カスパー・フオベル作（どちらも天理図書館蔵）

詳細は、博物館ホームページでご案内しています

【開館時間】9:00~16:45(入館は16:15まで)
【休館日】毎週月曜日(ただし8/12は開館)、8/13
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) TEL:022-225-3074

▶博物館ホームページ 仙台市博物館 検索
▶博物館X(旧ツイッター) @sendai_shihaku